

《新世界》から発信されたドヴォル
ジャークの手紙と当時のアメリカ

ジャークの家の管理人。彼がアメリカ滞在中、庭や家屋の世話をしていた）

《ヤン・ホディーク宛て》(原注「生年没年不明、プシープラム出身の鉱山労働者、ヴイソカーのドヴォル



(カットも筆者)

その

半場 久也

1893年6月 ルイスビルヴィル
ウインネシック会社 アメリカ合衆国
アイオワ州

『親しいホディーク様！ あなたの手紙は無事に到着しました(ここまで18日かかりました)。あなたと奥さんが私等のことを思っていてくれる気持ちに感謝しております。子供達が無事にアメリカに到着したことは既に知っていますね。』

(原注「1893年5月31日にレジー・コウテイカ《前出・義妹》はドヴォルジャークの子供等と共に「ニューヨーク」に到着した)

到着後直ちに、私等はニューヨークからスピルヴィルに休暇を利用して旅行しました。ここはボヘミア人の住んでいる所です。ここはチェコ式のミサと学校があるのです。丁度ヴイソカーに居るように。スピルヴィルへは千三百マイルもあ

くて疲れます。子供等は私等と同様に大いに我慢しています。無事に到着して皆元気にしています。

ここは気に入りました。到る所まるっ切りチェコだらけです。農地は全体に広がって、殆どの家は森の中にあつて、お互いに1〜2時間も離れているのです。入植者は一般的に少ないですけれど、ここに一旦足を踏み入れると、とても具合がいいです。

しかしながらボヘミアでなんとか暮らしている人はここへ来たがらないのです！ 到る所が美しいです。そして家は最高に素晴らしいです。昨今は最早以前様にはゆきませぬ。土地は値上がりし、入植者は、土地が無料が大変やすく手に入る西部に向かつてもっと行かなくては成らないのです。

トウジエプスコの僧侶が私の命名日に手紙をくれました。プフタさんからもです(原注・アロイス・プフタはジエプスコ教会の教師で合唱長)。今日彼等に返事

を書きました。当時のお坊さんは素晴らしい馬を持っていて、子供達と私は、毎日彼と一緒に馬で出かけるのでとても楽しいです。

アイオワ州ではビールの醸造と販売が許されています。けれど、酒場の主人はそれを売っているのです。しかしそれを持ち出すと、彼等は、罰金を支払わねばなりません(千グルデン以下)。アメリカ人は不思議な人間達です。信じられないことですが、この罰則を作ったにも拘わらず彼等はビールを飲むのが好きなのです。

そういう点では我国では勿論具合が違います。もしもボヘミアのあなたの所どころな暑い時期であれば、あなた方の喉は乾くでしょう。そのために私はあなたに5ドル送ります。(プシーブラムであなたは11グルデン、50クローツァーを受け取るでしょう。)1ドルは2グルデンと30クローツァーです。我々の健康に乾杯しましょう。フエンクルと伯父のプロコフを呼んで賑やかにやってください。その

お金の内からロイツカ(原注・ホデーの妻アロイーズ)の誕生日に9グルデンを、残りはビール代に』

ではごきげんよう!

コメント【1892年12月19日のスケッチから始まった新しい交響曲《新世界》を翌93年5月24日に完成させた作曲家は、その直後5月31日にボヘミアからニューヨークに到着した子供達一行を

名曲《アメリカ》を3日で完成

連れてアイオワ州の僻村スビルヴィルへ出かけた。何故そんな田舎へ行つたか?そこは前出の、ドヴォルジャークのブラー八音楽院での弟子ヨセフ・ヤン・コヴァルジークの生地で、彼の父親がそこで学校の校長をしていたからである。

多分コヴァルジークが盛んに宣伝したからであろう。チェコ人はかりで出来ている大変静かな草原の中にある村だ。作曲家は多分ニューヨークの様な落ち着きのない所にいささか閉口していたし、

「チェコ人はかり」と言われて気持ちが悪く動いたと思われる。確かにそこに滞在して満足した。メスマーの著書からコヴァルジークの《思いで》を引用する。

「我々の《キャラバン》、或いはグループは11人だった。先生と奥さん、それにコウテッカー夫人、6人の子供、女中(この人はコウテッカー夫人がボヘミアから連れてきた)そして私の如きつまらないもの。ニューヨークからスピウ

イル迄の道(約1300イギリス哩、約2112キロメートル)はフィラデルフィア、ハリスバーグを通り、アレガー山を越えてピッツバーグへ、それから更にシカゴを過ぎてスビルヴィルに至る。

この旅は先生を事のほか夢中にした。今何処を通過している等々。私はいちいち説明しなければならなかった。しかし道程はあまり長く感じなかった。全てのものが『ガタガタ』鳴っていた……」

日曜日には旅行団はシカゴに着いて、そこを一日中見物した。夕方には更に列車

でミシシッピ下川の一部分に沿って進み翌日やつとカルマールで下車することが出来た。コヴァルジークの父親と導師トーマス・ピリが駅に迎え、有名な作曲家に挨拶した。それから1台の馬車が一行を最後の8キロメートル先のスピルヴィルへ運んだ。

ドヴォルジャークは故郷に帰った気分になった。毎朝4時に起床し、散歩を楽しんだ後、作曲をし、(弦楽四重奏曲へ長調、通称《アメリカ》それに続いて弦楽五重奏曲変ホ長調)6時に教会でミサをオルガンで弾き、教会に来た村の人々とお喋りをし、午後はまた広大なプレーリ草原を散歩し、夜は地元の年寄りから、アメリカ開拓時代の話を傾ける、という田園の生活を楽しんだのである。

ここで、あのコヴァルジークが残した手記に、四重奏曲《アメリカ》に関する記事が、前出の内藤久子の著書に紹介されているので引用する。

「……スピルヴィルに到着してから3日目の6月8日、ドヴォルジークは新し

い作品となる弦楽四重奏曲十二番へ長調《アメリカ》の第一楽章に取りかかりました。彼は先ずこの楽章を翌早朝に完成させた後、すぐに第二楽章を書き始め、同じ日の夕方には第三楽章を書き始め、同じ日の夕方には第三楽章に着手しました。

そしてその翌日、彼は六月10日までに弦楽四重奏曲を完成できるように第四楽章へと筆進めていったのです。彼は大いに満足して最終楽章の最後の五線譜の下に『神に感謝を、私は満足している。それはすばやく進んだ』という言葉を添えました。……かくして作曲家と私の家族によるカルテットが結成され、第一ヴァイオリンをドヴォルジークが、第二ヴァイオリンをこの私が、そしてヴィオラを娘のチェチリアが奏し、息子のヨゼフはチェコを弾きました……」とある。

あの名曲が、ただの3日で完成されたとは全く信じられない。

スピルヴィル滞在中、作曲家は2度程旅行をしている。ひょつは8月12日に開

催された《シカゴ万国博覧会》での《チエコ・デー》に自作をいくつか指揮するためであった。二つ目は9月になって、富裕な同胞人から招待されてオマハへ出かけたことである。彼は何処へ行ってもチエコから世界的に有名な人物が来たというので、同国民から大歓迎を受けた。因に《チエコ・デー》で指揮をした曲目は、交響曲ト長調(第八番)とスラブ舞曲第一巻より3曲、そして序曲《わが故郷》であった。

旅行の途中寄ったミネハハの滝の美しさに感動した彼は、その印象を、ト長調の第一楽章で表したという(内藤著・引用)。更にその後ニューヨークへ帰る途中寄ったナイアガラ瀑布に驚嘆し、コヴァルジークに、口短調の交響曲を作りたい」とこぼしたそつだが、結局作曲されなかった。内藤の著書によると、その印象はピアノ曲《フモレスカ》第八番スケルツォのテーマになっているという。